乳質向上ミッション ～牛の個性を見極め 協働の心をもって～

鹿児島県立農業大学校 畜産学部 酪農科　2年　長野 楓

私が酪農をやってみたいと思ったきっかけは、将来の夢もなく実家の野菜農家を継ごうと思い、地元の種子島で農業が学べる高校に入学し、ホルスタインに出会ったことです。それまで酪農には全く興味がありませんでした。そして初めての酪農の実習に大きな衝撃を受けました。動物は大好きですが、目の前の牛が想像以上にとても大きく怖かったのを覚えています。しかし、朝早くから搾乳やエサづくり、床替えなど目まぐるしくあっという間に過ぎていく一日が私には向いていました。さらに気が付けば毎日牛舎に入り浸り、ホルスタイン共進会に向けて相棒の牛と毎日特訓したり、うんちまみれになったりしても気にせず乳牛と戯れて過ごしていました。気が付けば私の友達からのあだ名は“牛”です。なぜこんなに酪農に魅力を感じたのか明確には思い出せませんが、この頃には既に自分の中で将来酪農をするのだと決めていたような気がします。

高校卒業後は、念願の農業大学校酪農科に進学できました。私たちの学校の酪農場では、フリーストール牛舎で搾乳牛20頭、育成牛と併せて40頭を飼養しています。搾乳方法はミルキングパーラー方式です。これを10名のクラスメイトで管理・運営します。飼養頭数と人員だけをみると、マンパワーも十分で、徹底した飼養管理ができるだろうと思うかもしれません。ところが、私を含めてメンバー全員の実家が酪農経営ではありません。しかも４名は農大入学まで牛とは全く関係の無い環境で生活してきました。しかもほぼ毎日、座学講義や学校イベントの連続です。朝の管理中に、体調不良の搾乳牛を発見しても、後ろ髪をひかれながら講義に出席し、講話に集中できないことや先生方に治療や対処をお願いすることも多々ありました。

さて、私たち酪農科43期生には、達成しなければならない重大なミッションが２つありました。一つは東京オリ・パラに乳製品を提供するためのＪＧＡＰ（家畜・畜産物）の認証取得です。もう一つは鹿児島県酪農協同組合が主催する乳質向上共励会で優勝し、鹿児島農大が２連覇を果たすことです。

一つ目のＪＧＡＰでは、農場整備や育成・餌やりの手順のマニュアル化に取り組み、牛たちの世話の内容や健康状態の記録の徹底に努めました。先生方の厳格な指導の下、私たち学生が実践を繰り返し、学校全体で一丸となって取り組んだ結果、令和３年1月に全国の農業大学校で初めて認証を受けることができました。残念ながら新型コロナウイルス感染症の影響もあり、東京オリ・パラへの食材提供は叶いませんでしたが、ミッションの一つはクリアできました。

もう一つの乳質向上共励会の連覇については、乳質の向上において、私たち学生が

主体的・自主的に農場の管理・運営を行い、目標を明確にすることで、お互いの情報を共有しつつ、それぞれが責任感をもって飼養管理を行うことが最も大切です。私たちは1年生の7月に、2年生から農場を引き継ぎました。そして私は、自ら希望して農場長になりました。それから目まぐるしく忙しい日々が過ぎ、1年間の農場管理を終えようとしている時期に、そろそろ共励会の結果が発表される頃だと思うと、落ち着かない日々が続きました。しかし、どこからも、誰からも何の知らせもありません。“きっと今年はダメなんだろうな。農場長として責任を果たせずクラスメイトにも申しわけない”と思いながら、昼食の列に並んでいるとき、私のスマートフォンに酪農を実践している先輩からメールがありました。「コンクール1位おめでとう。」、信じられませんでした。私は「本当ですか!?証拠は?」ととっさに返信していました。送信されてきた入賞者一覧表の1番上には“鹿児島県立農業大学校”と書かれていました。嬉しくて、嬉しくて人目をはばからず歓喜の声を上げてしまいました。隣にいたクラスメイトにメールを見せると、「わー、やったね!」と、私以上に喜んでくれました。気分は最高、心のバロメーターは、落ち着かない日々を過ごしたレベルマイナス10からプラス100に一気に駆け上がった感じでした。その日の夕方、クラスメイト10名が控室に集まり作業報告を終えた後、担任の先生から「乳質向上共励会で見事2連覇を達成しました。」と発表され、自然と全員の拍手が沸き起こり、農場全体が笑顔に充ち溢れました。特にそこから数日は、牛たちにこれまで以上に感謝の気持ちを込めて優しく丁寧に接したような気がします。数日後、農大講堂で県畜産課長から褒章を受けました。“賞状　鹿児島県立農業大学校殿　あなたは鹿児島県酪農協同組合主催の第三十四回鹿児島県乳質向上共励会において特に優秀な成績をおさめられたのでこれを賞します　令和3年6月24日　鹿児島県知事”、受賞の瞬間は、喜びよりも安堵感に近い心境でした。

改めて1年間を振り返ってみると、農場が上手く回っていることや運営が順調に推移していることより、なぜか牛の調子が悪かったことや学生間の揉め事などが鮮明に思い出されます。私たちのプライドをかけた乳質向上対策は、乳房炎の早期発見や早期治療という基本を忠実に実践することでした。乳房炎は、思いもよらない油断しているときに突然罹患してしまいます。早期発見のために、特に私たちが心掛けたのは、個体ごとの性格や行動の特徴を詳細に把握することでした。そして、一人一人が牛の状態変化をチェックし、小さな変化でも気に掛けることが最も大切であることを学びました。例えば、目はくりくりしてかわいいが、回し蹴りが強烈で、できれば搾乳したくない“プリンちゃん”、横になっているときに、人が寄りかかっても嫌がることなく、優しい性格の“ランちゃん”、柵のピンをものすごい速さの舌さばきで開けてしまう脱走の達人、賢さがピカイチの“カンカン”等々、搾乳牛すべてをみても同じ性格の個体は1頭もいないことの気づきは、私にとって大きな発見と成果でした。さらに“チーム酪農”の重要性も学びました。先輩から農場を引き継いだ

時点で、わからないことだらけで、みんな不安を抱えていました。とにかく最初の1、2か月は基本作業を覚えることに必死でした。それぞれが“一生懸命”、“ちゃんと”取り組んではいるのですが、慣れてくるにつれ、次第に牛や酪農に対する認識のズレが生じ始めました。マニュアル化されている作業のレベルにも個人差が出てきました。そこで、ついつい自分の基準で判断してしまって、それを相手に求めたり、叱責してしまったりすることが何回もありました。そんな時は、気分も落ち込み、牛の世話も面白くありません。複数人での農場運営の難しさを痛感するとともに、仲間への配慮、気遣い、共感の重要性も経験することができました。

最後に、これから私は、故郷である種子島の酪農法人へ就職します。クラスメイトの全員も酪農関係法人や畜産関係の会社等、次々と内定を受けています。私は就職後、農大での経験の中で培った、牛の個性と協働の精神を活かし、当面は乳質の向上に貢献することが目標です。そして、10年後には雇用就農した会社の牧場長として、南国種子島から従来の乳質基準だけでなく、牛たちへの配慮や感謝を加味した高品質な牛乳を全国の消費者に届けられるような活躍をする夢を抱いています。